

国文学研究資料館蔵『ねんぶつ』絵巻

―翻刻と解題―

恋 田 知 子

要 旨 本稿は、未紹介の絵巻『ねんぶつ』（国文学研究資料館蔵）を翻刻し、その解題を附したものである。

一、書誌

【所蔵者整理書名】ねんぶつ

【函架番号】ヨ2―73W

【外題】なし。

【内題】なし。

【書写年時】寛文・延宝（二六六一―一六八二）頃。

【表紙】金茶地に菊牡丹唐草文様を織り出す金欄緞子。

【見返】金布目紙。

【料紙】上質鳥の子紙、金泥下絵（松樹・秋草）。

【数量】一軸。

【寸法】縦三二・〇糎。全長一三米一四・七糎。

【紙数】二七紙。

【字高】二六・五糎。

【挿絵】極彩色。全六図。

【本文】漢字平仮名交じり。

二、解題

ここに紹介するのは、国文学研究資料館蔵【ねんぶつ】絵巻一軸である。本書は「ねんぶつ」と仮題されるもの、現存する仮名草子『念仏草紙』とは異なる内容であり、箱書きや極めの類もなく、おそらく冒頭に「念仏」の文字が記され、その描写があることから、便宜上付された仮題と判断される。管見の限りでは、他に同一内容の作品は知られず、新出の物語とみなされる。その内容は、以下のとおりである。

下野国結城左衛門は、戦で息子を亡くしたことを契機に発心遁世し、一所不在の僧（しんかん法師）となつて高野山を巡り、ある庵室にたどりつく。庵室の住持は、かつては丹後国の「おほちのすゑとし」という宮仕えの身であつたことなどを語り、その後二人の僧は連れだつて、かつて住持がいた葛葉の里の翁のもとへと向かう。一方、下野国に残された左衛門の妻子は、左衛門の行方を探し求め、遺児「せん千代」が那須野の明神のお告げを蒙つたことから、高野へと向かう。父らしき僧が葛葉の里に向かつて来たことを知つた「せん千代」は、下野の母に報告するため帰郷し、従者を連れ、再び父を尋ねる旅路につく。

左衛門が発心遁世する経緯については、本文中の会話から知られるもので、おそらく本作品には戦の様子を語る前半部分が存在していたものと思われる。また、父の居場所を知つた「せん千代」が旅立つ場面で終了しており、その後、葛葉の里での父子の再会が語られるはずであることから、本絵巻は三巻仕立ての絵巻の中巻にあたる端本と推察される。

遁世した左衛門が訪れた高野山の庵室には、『山家集』所収の和歌二首〔一〕が添えられた西行の絵像が掛けられてお

り、これについて語る住持の台詞からは、高野聖としての西行伝承を想起させるものがある。高野における懺悔語りや父子の別れと神仏祈願による再会を思わせる展開など、本絵巻には中世の発心遁世の物語要素が色濃い。一方、上質鳥の子紙に施された金泥下絵および極彩色の挿絵を有す本絵巻は、近世前期に盛んに制作された物語絵巻群のひとつに位置づけられる。詞書の筆は、国文学研究資料館蔵『羅生門物語』やスペンサー・コレクション蔵『大職冠』などの書写者として知られる朝倉重賢⁽²⁾の字体によく似ており、寛文・延宝頃の写しと判断される。

【注】

(1) 新潮日本古典集成『山家集』一〇七四番歌「紅葉見し高野の峯の花ざかりたのめぬ人の待たるるやなに」、一三八番歌「散る花の庵の上をふくならば風入るまじくめぐりかこはん」。なお、一〇七四番歌は高野の西行のもとを訪れた寂然との贈答歌であり、本書は異なる伝承を付す。

(2) 朝倉重賢書写の絵巻群については、石川透氏「朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類」(『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店、二〇〇三年)に詳しい。

三、凡例

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打ち、会話文には「」を施すなど、読解の便宜をはかった。挿絵については、【絵1…】のように示し、描かれた内容を簡単に記した。なお、本稿末尾に一括して画像を掲載した。

四、翻刻

それよりいそかせ給ふほとに、高野山にもつかせ給ふ。大たう、かうたうの有さま、き、しにきこえてありかたく、たに／＼のきんけいのをと、二六時中にひ、きわたりて、いとたうとくそおはしける。又かたはらには念仏一さんまいのたうちやうに、らうにやくのそうあつまりて、しやうしんにこんきやうつとむるも、いとあはれにありかたし。みねのあらし木すゑをならし、鳥のさえつるこゑまでも、友ものりのひ、きなり。さて、おくのあんへまいらせ給ひて、自他しやうりやうの御ゑかうことには二郎殿、しゆつりしやうしんとんしようほたいと、ふかくゑかうまし／＼、

さて、おきなのことつてし

手のくそくとも、ある

てらへまいらせて、

ねんころにとふら

はせ給ふも、

いとありかたくそ

みえにける。

【絵 1 高野山の風景と庵室で語らう二人の僧】

さて、こ、かしこのあんしつを見めぐりた

まふに、あるかたはらに、かやぶきなるいほ

りの中に、山水をかけひにてふみのまへ

へうけて、いは舟にた、へませ候は、きん

くわをは、せて、いとあはれにしつらひたる。

あんしつのうち、ゑさうのしやかみた

そんをかけて、かうはなをそなへ、五十はかり

なるそうの、御きやうよみておはしけるに、立

よりてらいし、ともに御きやうあそはして

のち、ちうち申されけるは、「御さうはいつちより

の御まふてにておはしけるぞ」との給へは、「さ

む候、京かたよりしゆ行にめぐり侍るそう

にて候か、はしめてこの山にむかひ候。まこと

にをのくかやうにうき世をすて、こけの

とほそをとちて、ひとへにほたひのつとめ

をもつはらにとりをこなはせ給ふこと、さり

とては御うらやましくこそ候へ」との給へは、ちう

ち申されけるは、「われもいにしへは去人にみや

つかへしものにて侍るか、いさ、か心にさはること

ことありて、しよせんほたいをもとめんにはし

かしとそんし侍て、この山にのほりて、かや

うにねんふつ三まいを所作として、く

はうゐんをふる事、すてに十三年也。今

ははやうきよのわさをみ、にふる、事

もさふらはねは、おこるへきあくねんまう

ねんもさふらはす。た、ねかふこと、ては、わ

うしやうのそくわいをこそねかはしく候へ」と

そ申されける。しんかんはきこしめし、「まこと

にたうとくこそおほし候へ。これなるふつ

たんのかたはらに、ほうしのすみそめなるか

ふてをもちて、す、りをそはにおきたる

ゑさうは、いかなる人にておはしけるそや」と

申させ給へは、「是は西行上人にて侍る。こ

の山にはしめてまふて給ふに、このいほ

りに立より、しはしきうそくおはしけるか、

ころはやよひのはしめつかたなるに、このう

しろなるみねの花さかりなりけるを

み給ひて、心のうちに思ひよれることや

ありけん。かくよめる。

もみちみしたかの、峯の花さかり

たのめぬ人のまたる、やなそ

又あらしのいたく花をふきちらしければ、
花のために春風はいとつらきものによ
とて、

ちるはなのいほりのうへをふくならは

風いるましくめぐりかこはん

かやうによみ給ひて、れうしをこふて、わか
かけをうつしをくへし。なきひとのかたみに
念佛し給へとて、かやうにかきをき給ふ

ほとに、あさゆふゑかうをなさんかため
いく年月つたへ侍るそや」とそかたりける。

しんかんほうしは、「さては六十よかこくを
めぐり給へる人にてありけるよ。てうにつ
かへし人のいかなるくわこのしゆくえんに
よりてか、かくありかたくもかたちをやつ
して、哥のこゝろを友として、三かいをくひ
にかけて、一仏しやうにいたり給ふことの有
かたさよ」とて、やたてをとりいたしてかくそ、

あはれにもあはれをそふるわかこゝろ

にしゆく月のかけをなかめて

とかきそへ給へは、ちうち、「世にありかたく
もよみ給ふものかな」とて、よもすからさま
く御ものかたりとも

おはしまして、四五日

こゝにぞましく

ける。

【絵2 西行の絵像を前に語らう二人の僧】

このちうちも、もとはたんこのくにた
なへの住人に、おほちのすゑとしと申
人にておはしけるか、三条のひてうち
こうにその年月つかへ給ひしか、いかなる
しゆくせのちなみにや、世をそむきて
この山にとちこもり、かくおこなひすま
しおはしけるか、はしめはくつのはのさとに
いほりをしつらひ給ひし、こゝをさりて、い

まこのところに地をしめ給ふ。されは、かん

しんほつもししかるへきところあらは、

いほりをむすひてちうきよをしめはや

とおほしけるか、このそう一所不住とお

ほして、「しはらくこのさとにあしをやす

め給へ。さもあらは、御身と我もろともに、

のちの世をねかひて、ひとつしやうとに

生れ給ひ侍らん」とのたまへは、しんかんは

きこしめし、まことに我かくほつしんしゆき

やうのこ、ろさしふかしとはいへとも、か、るた

うしんのちなみある人をもたず、かやうの

人にちかつきてこそしやうしの一大し

をもたつね侍らはやとおほしめして、「とも

かくも御はからひにおうしたてまつるへし」

との給ふほとに、このちうちとうちつれて、

かうやをくたり給ひて、くたんのおきな

かもとへそおほしける。あるしな、めによろ

こひて、二人のそうをもてなしかしつき候

ける。さてくかうやにてのありさまく

はしくかたり給へは、かんるいをなかして、よ

ろこひける。さて、くつはにいほりをしむへ

きよしかたり給へは、あるしもよろこひて、

「さては、今よりはゆき、のたよりに、御や

とをまいらせんことのうれしさよ」とて、よ

ろこひにける。さて夜もあけ、れは、いとま

をこうていてさせ給ふ。それより、ちうちは

くすはのあんしつに引つれ給ひて、よろつ

ようくのこと、も、ねんころにいとなみて

かへり給ふ。しんかんは、かりのやとりをもとめ

給ひて、御仏をあんちし、をこなひすましお

はしけるこそありかたけれ。さるほと、くに

もとにおはします、きたの御かたは、さへもん殿

ははかなくも、いつちにいかなる御ありさまに

てかおはしますらん、さためて世をすてさせ

給へは、いつくのくに、いかなる所におはします

とも、住ところはさためかたかるへし。すきやう

たうしんの御こ、ろさしにてあるへけれは、

この世にてたよりをきかんことはかたかるへし。

二郎にはし、てわかれ、さゑもんとのはいきてはなる、ことのかなしさよ。われもうき

世にあらんよりは、いかにもならはやおほしめせとも、ひとりのこれるおとうとの

二郎をよくくそたて、「ち、かゆいせきを立よ」とくれくの給ひし事なれば、

さすかにはかなくなりなむ事もなり

かたしとて、御くしをおろさせ給へは、めのと

もともにそあまになりて、二郎殿の御は

たいをそふかくとはせ給ふ。

【絵3 尼となつて息子の菩提を申う左衛門の妻】

かまくら殿よりは、「なにとてゆふきはとん

せいしけるそ、その行をたつぬへし」と

おほせられしかとも、いかて御ゆくををしる

へきなれば、そのとし月ふれとも、かつてを

とつれもなかりしかは、三らうかはからひとして、所領をめしあけられは、らうとうしうかいもことくく、はうくへそうせにける。

今ははや、せんちよとの、母うへめのとなどはかりになりて、くりおかといへるところにふた

いのものに、竹村の左五といふもの人くをはこくみたてまつりてそをきにける。さる

ほどに、わか君はこ、ろにおほしめすやうは、そもくきうはの家を生をうけ、ちやく

りうとよはる、ほとものものか、所領けんめいの地をうしなひ、ち、の行をもしらす、む

なしくくはうめんをすこさん事、名をくちはたすのみならず、それかしほそをかむに

そのえきなし。されは、一めいにかけて、まつち、の行をたつねて、その、ちいかやう

にもことをとりをこなは、やと思ひしめせとも、さらにおほしめし立へきみちもあら

ねは、とかくしんふつにいのりたてまつり

て、三ほうのりしやうをあふくへしとおほ

しめして、なすのの明神うちかみ、八まん大

ほさつへ、一七日かそのあひた、たんしきを

したまひて、ち、のゆくゑをしらせ給へ

とせい／＼をいたしていのり給ふぞ、まことに

もつてあはれなり。されは、神もこれをあは

れとやおほしめされけん、七日にまんする

あかつきかた、ありかたくも八まん大ほさつ

は八しゆんあまりのらうそうとけんしさせ

給ひて、かうそめの御ころもに、おなし色の

けさうちかけて、ひあふきもたせ給ひたる

か、つえにすかりて御みすたかくかきのけて、

いとかうはしき御こゑにておほせられけるは、

「まことになんち父か行ゑをこひかなしむ

事ふひんなり。されとも、ち、はゑとをいと

ひ、しやうとをねかふ身となれば、あふても

かひなきうき身ぞかし。さりながら、ち、にこひ

しく思ひなは、これなる山のふもとに一の

てらあり。これへ行てたつぬへし。ゆくゑは

たしかにきかなん」としめし給ひて、けすか

ことくにいらせ給ふと思へは、ゆめはさめにけり。

うちおとろきて、こはありかたき御つけとて、

かさねてらいいはをたてまつりて、さてそ

れより山もとさしていそき給ふか、こ、にせい

いしといふ寺あるなり。これへいらせ給ひて、

「いかにや、この寺中にたひなる人は候はぬか」

ととはせ給へは、そうのいて、「それはなに

ゆへたつね給ふぞ。このほとみやこかたより、

あき人のくたりて、このてらにやとし給ふ

か、それを御たつね候か」と申されければ、せん

ちよはきこしめして、「さらは、ちとたつね申

たきことの候。あはせてたひ候へ」と申され

ければ、やすきこと、て、このあき人をそよ

ひいたして、あはせ侍けり。その時、せんちよ

の給ひけるは、「なにともことのさためかたき、

たつねことにて候へとも、まつくをしへに
まかせて、これまでまいり候。それかしは、
此くにの住人にゆふきのさゑもと申

もの、子にて候。一とせ京かたきやくらんの
きさみ、たせいをうつしてまかり候ひし

か、それよりいかなることありてや、くにもとへ
かへらす。すくにとんせいせらる、とうけ給り

候か、その、ち二たひともかくのゆくゑを

うけ給はらす候より、御とも心ならずたつね
はやと思ふとも、その住ところさたまらね

はしれかたし。あまりはかなく思ひ候て、神仏
ふかくきせいをかけて候へは、この山もとの寺

へまいりてたつねよ、さもあらはするへしと
たしかに御しけんかうふりさふらふほと

に、御をしへにまかせて、これまでまいり候。

うけたまはれば、京かたの人と聞え侍る
ほとに、もしもさやうのにたる事も侍ら

は、うけ給はらんかために、

さてこそたつね奉れ」と
おほせられ候。

【絵4 高野山麓で父の消息を知るせん千代】

あき人はうけ給はり、「さては、き、およひ

たてまつるゆふきとの、御子そくにてお

はしますか、それかしはみやこかたとは申せ共、

京より六七里のあなたにすむくす葉

と申所の住人にて候。とうこくかたへまい

ねんまいりて、さまくのあきないをつか

まつり候。されは、御たつね候人にはたしかにそ

れかと思ふ人もさふらはす。さりながら、この

一兩年さきかとよ、としのころ四十はかりなる

ほつしんしやのきたり給ひて、あんしつを

とりつくるひ、念仏一さんまいの所地に

て年月をくり給ふか、あるときつれくの

さんけ物かたりあるつゝてに、御かたりさふら

ふやうは、それかしは、とうこく下つけかたに
すみしものなるか、こんとのひやうらんまか
りのほり、いくさにあひ申候か、それかしてう
ほうとそんな子を十七さいにてうし

なひ候。中くてからをつくして人めには、
かるほどのはたらきをいたして候か、かれか
ことをおもへは、世にふひんにそんなするに

よりて、たちまちゆみをうちおり、やを
かなくりすて、ひとへにのちの世をね

かひいり候」と御物かたりあるほとに、人く

申は、「それはふしきなる御とんせいあしく
さえきつくはせん、かへるとは御うへの事
にて侍る。さて、くにもとに御しそくたちは

おはし候はぬか」とたつね候へは「そのおとうと一
人候なり」と語られ候。「これより外にめつらし
き人も候はず」とそかたりける。せん千代はき

こしめし、御なみたをはらくとなかし給ひ
けるは、「名字はなにともきかせ給はぬか」と

の給へは、「それはなにとも御名のり候はず」

とそ申ける。あらうれしや、さてはち、うへの
御行系はこれなりとおほしめして、「さて、そ

のくすはと申ところは、みやこよりいかほと

みちは御いり候」とたつね給へは、わつか五六里

はかり御入候と申せん。千世とのきこしめし

て、「御めにか、り、ことのやうをうけ給はり、

うれしくこそは候へ。やかて又御めにか、り

候はん」とて、人くにいとまこひねんころに

し給ひて、わかやへそかへらせ給ふ。さて、母

うへにおほせらる、やうは、「なによりもつてう

れしきことをき、しものかな。あまりち、

うへの御ゆく系のおほつかなさに、うち

かみをはしめて、ふつしんにふかくきせ

いつかまつり候へは、ふしきなる御しけんを

かうふりて、やまもとのてらへまいりて

たつね候へは、みやこかたのあき人の宿

をとり侍るか、これかくす葉といふとこ

ろのものにて候か。ち、うへはたうしんふ
かくおこし給ひて、あんしつをむすひ
て、をこなひすましおはしけるとうけ
給はる」とかたり給へは、

【絵5 下野に戻り、母に報告するせん千代】

母うへはきこしめして、御なみたはらくと
なかし給ひて、「あらいとをしのせんちよ
かな、ち、うへのかくなり行給ふより、御身か
こ、ろさしこそあはれにやさしく思はるれ。
家もわする、ひまもなく、ち、うへや二郎
をとかくとおもひくらせとも、思ふにかひ
なき女の身なれば、いつちをたよりに
たつぬへき、みちもわきまへす、かくあさまし
きうき世になりはつるまで、むなしくな
けきくらせしなり。御身か女子にて有ならば、
いかてかち、の御うへをとかくともさたす

へき。かひくしくも御ゆくゑを聞て、母に
しらする事こそうれしけれ」とて、たもとを
かほにをしあて、なき給ふ。せんちよとの
は御らんして、「いかにやは、うへ、かくてむなし
く月日を、くるへきにあらねは、ち、の行
ゑをたつね候へし。当主のほどよくく
まかせ給へ」との給へは、母うへはきこしめし、
「こはなさけなや、二人の人くにはなれて
も、御身ひとりになくさみて、此とし月を
をくりしに、御身にかたときもはなれなは、
われは何となるへきそや」とて、又さめく
となき給へは、せん千世とのはきこしめし、
「あらはかなや、おやにてましませとも、いく
としつもりても、やくにた、ぬは女なり。それ
けんめいの地にはなれ、君にをかせる
つみもなくして、か、るうき世となりはつるは、
いかはかりくちおしきことならずや。とかくは
ち、うへをたつねて、ことのやうをうけ給は

り、二たひ家を引おこすか、さらすは、しかい
をとけてしなるとこそは候んつれ」とて

いからせ給ふ。母うへはきこしめして、「われも
それは世にうれしくは思へとも、はるく

のたひのそら、又は行さきいかはかりおはす

らんとこ、ろつくすもかなしければ、さて

こそとかくとなけかるれ」と語られければ、

せんちよとのはきこしめし、「そのきならば、ち

かきほどに思ひ立へし」との給へは、は、うへは

きこしめし、「御ともの人くをようゐせすは

かなふましきか、いか、」とおほせられければ、

左五のせうはうけ給はり、「それかしちや

くしの藤三郎をしたて、御ともをさせ

申へし。かれはすいふんみちにおゐてはた

つしやものにて、くたひる、といふ事なし。宮

こへこそはまたのほり候はね、するかと

をたうみのうちまては、たひくまいり候そ

や。かれを心やすくめしつれられ候へ」と申

ければ、せんちよとのはきこしめし、「それこそ
はしかるへけれ。た、しゆきやうしやのかたち

に身をやつし、人めをしのふみちなれば、い

つとなくこ、ろしたいにのほるへし」とそお

ほせける。かくて吉日えらひて、すぐに御かと

いてありけるか、藤三郎はあき人のふせいし

て、せんたひつをそおひにける。せんちよ

とのは、めしもならばぬたひは、き、わらく

つをしめはかせ給ひて、すけのをかさを

めし、すくにいてさせ給ふとき、は、うへ

御なみたにむせひ給ひて、はかくしく

御いとまこひをもし給はねは、めのとのあま

をよひ給ひて、「母をよくくなくさめた

てまつれ、やかてめてたくくたるへし。よき

たよりもあらは申こすへきそや」とおと

なしくの給ひて、いてさせ給ふ御すかたは、

ち、うへにいさ、かもたかはせ給はぬことの

いみしさよ。「あれく御は、うへ御らん候へ」と

てふししつみ給へるを、引おとしてみせた
てまつりければ、御あとのかはる、ほとみを
くらせ給ひて、とてもかくにも御なみたは
つきさせさりけり。

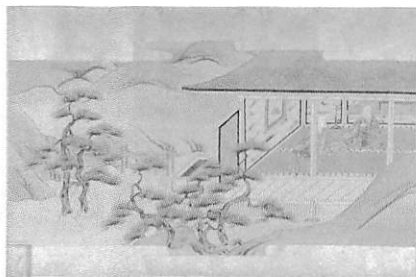
【絵6 父の行方を求め、下野を旅立つせん千代】

参考
挿絵一覧

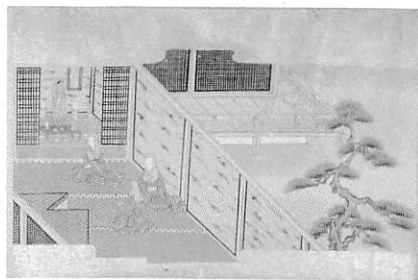
【絵1】



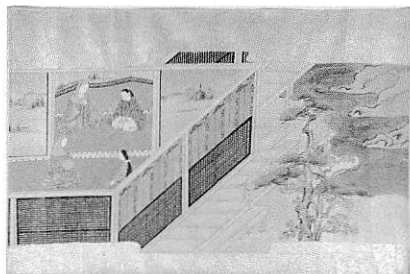
【絵2】



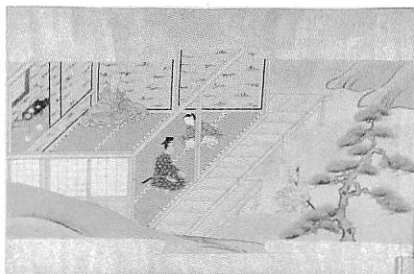
【絵3】



【絵5】



【絵4】



【絵6】

